

漢門
 師說
 卷一
 禮

~ 5
 921



文久二年壬戌新雕

花御本鳳朗著



蕉門
此記

師說錄

全二冊

直旨傳合套

東都畫房 一貫堂梓



新刊
921
門
繪
卷

繪畫作者の名あり時日
ありはまの文書を考
しし祖前の生あり得
たり趣し同くし梅子
生ありはま此表題あり
又遷化の時の首途の跡
此書海川へ移らんは五
させんりの杉風及梅村其
嵐堂とてしるの外あり
なりは思ふに此序越人
みつし書るるは遷化
の時の末の了途はかく
道の秘すありとあり記
事ありは菊生右の書あり
一ありありしを何あり
く一ありありしを何あり
てふ院をのちありんを
は名古屋へ持おあり又ハ
越人よりありしあり
屋海川へ移てありんハ

直旨傳師說錄の二書は本一書より誰か藏
きたりしりふたもたなく誰か志し集りしりふ
とも侍らば芭蕉庵の日永席毎の記事の様を
るるのまを事記しりけ持てありしりふりしりふ
ありは序ありあり事ありは是るる書ありありの記
事ありしりふ事ありありは誰かおれも是れは編
録ありしりふ本記ありしりふりしりふりしりふ
はなりしりふありしりふの書ありあり論し志あり
新しきありありしりふ門人ありありしりふりしりふ
は志ありありしりふ物語ありあり書あり又芭蕉ありあり

二二

此書元來は事なれども
 ありし俳諧の發端を
 示すものなりとの趣
 石の燈籠をもちて
 といふ人々の心所
 遠歌の起る次第を
 ありと補ふは
 のまじりぬるを
 ありと又此書の表名
 ありと何れも古
 ありと意氣の盡
 古池の句は雨の
 冠を一句は
 事なれど自筆
 ある一軸あり
 としるを
 へりて右
 しかへての
 前非意を此

正風俳諧直旨傳

不易流行

則大道

有心

大無指

夫天地を風雅也萬象を風雅也此風雅を佛

祖の肝膽なり四時を從て移るは

思ふ所心月月ありは

ありと常光心月ありは

容如幻容ありは

出で禽獸を

古池や蛙飛ぶ水の音

野在那須雲岩寺佛頂和尚使六祖五左門問桃青曰如何是祖師西來意答
 曰蛙飛ぶ水の音也是五文字をて木乃と草右鎌倉園覺寺成拙和尚

毎意を出了志をく有意
み任寸其有意則毎意是
舊門之奥意也句依之

古説

昔者の中は神代の
八雲の和歌をとり神代
和歌の姿を調ふの風傳
をとりて此俳諧の
名は定むりこれと伝
ハ余の歌と習りて能
の爲をあらむ表は法
岡の人を舎める句法を
玄音法印のくゆ俳句を
上段の座をゆかく儼
と貞徳の説も同々
金玄くも意ハ意ハ意
を多しはくも意ハ
貞を意よつて非を
是宗因の説より貞を
よいひ意を意よ取ら

傳尚同二代清蔭和尚答同

○俳の字の事

翁曰字義の論ふか、もくは只ふんといふ
名もてられたる他門平業一と論定うは
此を控を用人唯我門よ故ふ人なり

○俳諧式之事

翁曰俳諧の式は連歌の式に似て先達の沙汰
一とて連歌平新式あり追加せふ二条攝政
良基公の活作之令按る一一条禅閣の活作なり
此二ツを一部と志せらるる肖柏の作之連歌平

俳諧の道はあつたといふ
説はいつくや古はく申
た候りて俳諧の字を確
出寸を人好事と爲れ
りあるれ
勅定をりて強し書な
れと昔を古実の例と志
く昔は俳の字の用ひ
多し又一説俳之字再板
の誤と云

浴東清水地主の法樂
本式連歌あり毎月十八日
興行時の宗西出座本式
十句表之裏白の連歌
の表を正月四日北野管笛
にてる式之是ハ元執筆
の誤より起るるといふ
いり表を表は表て裏
を別帝のくは意を
根元ハ執筆を丁の表を

四ツとある物を俳諧は五ツと七ツと五
句と一俳諧ありと兼て安くと沙汰一は
ちり按るは追加漢和の式あり大概を俳
諧の式法と昔より定るなり貞徳の法傘をか
表す多し是等の式の中は信用するは
俳無言といへるなり大や一は表の式も
なくてハ調か一は月つとも表ありとい
へるもあはれ懐つと志とより之法式を定る
りするは意重なる事なりはるも表の本と稱さ
るるは法を以ては名を詮や代

也

かへりあやまり次の丁
形裏をうへて裏をまた
りふより二丁の間は白紙
出来たりとて時の宗匠
を戒りてあつた
の連歌と歌号して式と
す

前日俳諧ハ風雅の短刀
之太刀長刀の長き九
寸五分の匕首一刀
人をとむる理はひ
より俳諧の起りぬ世
をふりてあつた人丸赤人
をとりぬ貫之葉平公任
定家家隆号と俳諧の大
先生とて遍照能因寂蓮
慈園西行ハ此日域ハ二

とちれた侘諧の大道心小
町伊勢紫清少納言中
兼ももなき侘諧の智婦
人之ちの吟詠をくころ
余は目まハ和歌と見せ
られと詠詠をたてふ
ふともおろりや祖神とあふ
きまら昔神の言の人ま
いらのかくられまか山の端
逝ての吟西郊の月や々
りのを抄ももす百人一首
赤眼ハ八人てふふらなる
文章にてハ罪なくして配所
の月或ハ月を隈をたをの
こ思ひのりハ外此比の奉
白集かすくの文章も侘
諧の足つけ不之をを言
兼よりく十七字といひ
述まら侘諧の短刀なり
謙徳公和歌所の別當

小連歌を始りてあはれも世人を守りて
何事をも私小法を作りて是を思ひとら
る之指合の事ハ時並もより先々大方
をくも詠りたより若志ある輩ハ此趣を志起
ていより自門の大法ともあつた
○夏風の侘諧の辨
前日世ハ侘諧よりハ事ハ
のこ小懐持るる故ハ世平初よりといへ
るより古人の調和を以てかりて
らんや予此道ハ折ふより二十年ハ
を

を得たり名古人の俳諧を假るといへ
る詠を往古のたふふ
乃名を傳りてを意を用ひ寸代
後よりわいりやあを
侘諧ハ古人なりと云
寛ノうらを復夏風の
の境も此及何人
思ふより苦より詩歌
を實より入るを求
そのより実を求んと
を

三

香を煙より白ひの花と

今々名号の佐治三何

又白ひの志保元の起りて

後柏原院御守久我家の

黒方梅花の薫物並に佐治

ひーを牡丹花進上中より

時何とも後褒美かつけ

まんと勅一紙ひーは此巻の

事やこれいふやましく

勅許を蒙りたり白ひの

花の株出来たるなりよつて

連の席及び俳の席よこも

此巻の句作も時かまらぬ

黒方の薫物事古交とハ

なり

但於佐席今々此巻

吟声の時姓なり香主

の習ハ修

傳曰これ巻々万物の巻

しを様はあらぬ又櫻は

一室の貴人教ハ貴族の人

は巻の句を巻んよめ春を

引よて巻をりて

去来曰鶴養巻の時巻を

櫻はかへんと傳ハ先師曰

美名多しと子細なり九月廿五日咲くもさう
大に誤らばたす名木を隠し花の句多し
あへて一巻は櫻の事なり然るに花の句多し
いふ是等正巻なり花の句多し
さ申す却て貴族類一宗祇時代より正巻
花之本有るなり之宗長の時より巻の巻一
本両巻なり
勅許を蒙りたり白ひの花四本兩二ツハ
極りともなり
波の巻の巻古式より正巻はありといへども
扱へて正巻あり用らるる時をさし通らるる
の巻同事なり是れ巻の巻の貴族あり故
に巻見漏るるなり
○花櫻の論
菊曰花と櫻の子細川玄旨法印より秘して花
咲先生は口訣に於て正傳ありといへども後
より用らるるの巻一門人去来予々様巻の巻
小巻の巻を畧して彼傳を啓す事あり然るに
櫻一本の町々咲開く或る巻なりといふ字を
へき之は正巻なり



うり予ひあちりてを後
わを名をうち入出れ
ても廿六句をほくして
欲仙の教のまふといふ
へたを例を省て歌仙俳諧
と云へると云く此文を思
ふとのかると書れと極て左
圃の作者ともまめく
立圃同時の人と又但元隣
風流こそをちさんといふ
かといふ世ふくをまふ
の中は態とあまふや
お母つらふと左とや
かといふ此時代より
すの物とも思ふ

菊日神祇解と意の習
あつりつらふと世欲や神
秘一徳ら大予人予世の
中の字面を考へ此重秘

をあし尋露枯公へ傳へ
外他とまはるる信
神祇は神祇の句は二句
去へあむと二句を
捌り多練へ釋を因意
神祇と神祇と句を
意の情の神祇扱ふ

懐紙の端作の事
菊壯年とて祝世之敬仙

亭子とてさるるものもさるり
あちりて之所以ある
毎あやうと名祇のまふ
をあらけいへん之
此と全雅體時をさるり
の事とさるり
武舎と稱さるり
意の句昔より二句附
か中への大切へ作
の比す一二句より
此後門中子儀
わあ句意とも
了を必意の句附
左格の時や
及海へは新式
をさるる座の字面

○意の事
意の句昔より二句附
か中への大切へ作
の比す一二句より
此後門中子儀
わあ句意とも
了を必意の句附
左格の時や
及海へは新式
をさるる座の字面

意の詞を筆をてん
らあは大切へ作
の比す一二句より
此後門中子儀
わあ句意とも
了を必意の句附
左格の時や
及海へは新式
をさるる座の字面

○懐紙用捨の事
五

ワヨヨリナリノ依テ其地を圃にそ射すも射すも
正しく海にわたり夕の字立の字付てくろく
らけり雨と書へきあり聖か又曰く暴風と云
すなり

本枝のさまたたの事本枝字よ二句風体二句
括ふれを括ふへ一風と書きあれと是れ本
くろく一の風とワヨヨリあり本枝とワヨヨリ本
枝の腰へけくろくありありした
大麻連は神祇排は神祇
惠美須連は神の内に入らぬ依る神祇なり

本名鈴麻は限りきや
笠振ぬかとも此致うへ
推て做らへきや

人物は強と守たると記たの
物よ本葉ちり散らるると
曲は作て本の葉衣を
と云は昔木の敷ひよ引て衣は
ふらなる

葉なる白香
葉のやうふんは遠て香
小用なかり不味なる雄
器記は見へり

交代至命あり

秘子命、多小朝の如きや
失名うへく神祇あり

本葉は鈴麻は限りきや
小葉の奥芳聖の真同あり
木の葉は遠く冬へ衣類へ依るは白く
ありあり候義神農のあけの書本葉衣はし
袖の衣類あり句体より
鳩の葉連は離あり休るは夏へ水なる葉類
夏あり

葉の葉なるふあらるも夏へ衣の宮離あり
東宮の御事也
也

簪之泉のつれも難之
源氏よてしめり

石碑本と云ふるあきまら
之あきまらと云ふと云ふを
反之俗にあきまらるの碑本
あり反之

右二条翁の謂之
村自句の趣よりて秋を付れ
て秋ふなる保る

竹内二位家柏之傳曰
玉柏一名三種

一ハ水中の石をり
一ハ松を巻て云

一ハ石をて石をて潤より
かのまのまらう時のま
の名

又人の筆のすもいひ又
只梅を巻ても云
但クヌキも柏ノ内ニ

又北園してをを掛し
このハむらハハあり
むらかハハあり下の院
侯之

年枕植物よりあはれ迷路とらふ予之字を枕す

も非植物水より抱えし

毎枕昔枕植物あり

村雨雪より但春秋の句より附てはた冬夏秋
乃方よりなるあり

玉柏石の事之又屋松の屋を屋守とのまより

か事後より連なり雅之傳よりはるゝなるをを
湯突たりゆるといふも事之夏を蟬樹とらふ虫之

旦は生るる死をたらおれるよりを此虫之秋蟬
鈴をりよ又日影より鳥の飛かけのまらるとらふ

かけらふと云ふる是れか事後より蟬樹水の月
るるふと云ふる又聖と世の子のまらるかより六日
影を雲のまらおはる陰は蟬とらふと云ふ此二の
おは難なりかのやのかけハ影陰の二字を周申
ハハ松の門杉の意板よりハハ此植物

住居ると隠者の住所は云ふる句の
はまらるるに植物ありと云ふハハ
植紫を雑なり

植紫を秋之

繪より云はる茶の葉の影連る雜之二句之伝
不極

但扱へて香
を抹ちり

茶鴨茶田鴨は植物を川田は田の字附ても茶
也

蕪のすつきり草を
ふらめり

考の所を蕪の紙を
ふらめり

又伊賀の末且

又伊賀の末且 西島影之元
一書考の末且 此か句は
正附として終り終り終り
葉の事

又へてし竹の末且
若大きく終りし之を
いふありて終り
是も唱句

又曰 浮和の式を唱句より
宛らよらて漢和聯句と
増進をいふ
浮和と浮和と花門全
た不好る
此五句の事 古式の巻下
是をいふ

按ずるふ親句ハ正謂其の
句作りて途中を絶せし

持れくは分おし付の支る中よ定まら成る表
は終りしものも終りしものも終りしものも
正附附著した物を出た事 不好る之大や速終り
之句といふもの五句五句といふもの五句といふ
証は中しと云ふ事

○唱句の事

唱句を漢も倭も亦句をいふ事
基と云ふ是をいふ歌も下の句を出して上の句
附りしものも終りしものも終りしものも
中しと云ふ事

又へてし竹の末且
若大きく終りし之を
いふありて終り
是も唱句

○五義之変

歌の篇序題曲流御歌の口くふあまを記
あらは此五つは味ある事一の事と云練る
りしものも終りしものも終りしものも
中しと云ふ事

直

速終り親句終りしものも終りしものも
中しと云ふ事

一々書きたるなり正しくい
てあるなり之れは白ハ其
を崩してあふく作
字作の句を平たす
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり

鹿門の体性ハ其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり

當流の平たのるなり其の
あやした場あはれと其
されとすなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり

元々やこれと其の
麿也其鏡も其なり
其なりなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり

葉戸や鏡のなり其の
其のなりなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり
作するなり其意門の
若し作する中にも其の
体もあはれと其ハ
崩して作するなり

西

あつてふは色子遊しといふ一筋てあつてきりあり

菊曰切字の事助字あり
此も切字あり
一句の格柄をあらわす切字
とて極く用ひゆるくの
既去りのゆゆをさう初
初心のきめこの了管系
らぬらハ既遊の格柄を
あらわす

三地の間ハ初て其ハ切
石ハ塞くハ初て其ハ切
わは歴あつて其ハ切
をあらわすのりゆゆの格柄
ゆ大遠之禪之言務す所
心の余ハ不是歴の地此不
よて幾句は初て其ハ切
入不歴く其ハ切て安んす
一自他の分る不他の体
不留意

を親白しりゆゆのしんは遠きうもさう 既さう

○切字の事

菊曰切字の事助字あり
此も切字あり
一句の格柄をあらわす切字
とて極く用ひゆるくの
既去りのゆゆをさう初
初心のきめこの了管系
らぬらハ既遊の格柄を
あらわす

又曰初を云はす可平んあつて余情を余むを
さうて切りの

又曰自他の分る不是歴の体は不是句の切之
傳子曰

春もや、ゆれたるあや月と梅

ゆれたるあや月と梅とを
かくなつてさうとゆゆの初をあらわす

咲みと春 桃の中より初さうら

桃の中よりゆゆと川橋

春くと日わつたあつて秋の風

五

初平早く傳授きしとあり
其傳授かゝる

世下で文政の今も高此傳
ありし事通なり余ハ
更なり

日之は是れも入るるれ秋の風の如き一きは
日之みかかたり申といふは其の詞ありき
此曰赤寺のより此より大切の傳之執人なりぬ
華に根に傳授をきくは其を守んる事私
よあり此傳法家千流といふもや近世切字
此句根千きこへ傳ふとあり

○子尔蔡之事

菊曰佛佛傳といふ事其年周く多し予年來
此一道よりいふ言力を盡し神に確一因縁
を尋く時妙なり語多ありいふれ事河に

篇の五師
按るに貞徳貞宗季冷

宗因
今一人を極て遠く古人
宗祇ありし先貞徳
四人は道を遠くし宗
祇の心をとり然し是
を以て又捨て西行以上古人
の肝膽に入て候も其を
養明なりなり仍て師
より其の語あり

わ此に師五人あり師として師とては佛傳
兼能の時日其言を合らると云はれんよりハ
白老と云はれんと兼能の本意あり此境を
要する事なり活筆ありといふ亦見阿
らばなり老息ふ事なり宗因のい 候とあり
其席の不具淺留一貞徳も全く活筆あり其年
本心を碎くを色の子は極ありなれ一筆の了
管出要と書くる高僧の心をと見ぬことを本意
少多を子尔葉に先師小踏殿の一巻よく明ら
めゆり堂上の各も其の子尔葉の外なり一
道



畫譜注よりほく名目をわけて裁んけ治を
或は疑のや口の如きと数く教を魚川といふ
自在の指日河く大本末手本指景と歌文章の
よりかきら原今ふ徳語のよきも是よりわ
と言のち、語りきく、然れは天性并のれ
は後まほるその之此故ふいす、一と手本指景
を教の畫なる、一と畫をくして人の心凡俗
よなり、故より、一とわらむる、一とわらむる
得る學より、一とわらむる、一とわらむる、一と
申と名へ、一とわらむる、一とわらむる、一と

お川此方をさく、一と古歌古句を多く、一と
自然をさく、一と徳語のよき、一とわらむる
年来然れ、一と近來梅井一室、一とわらむる
手本葉細引綱回智の學地、一とわらむる、一と
と、一とわらむる、一とわらむる、一とわらむる、一と
一とわらむる、一とわらむる、一とわらむる、一と

○雜の句乃交

雜の句乃、一とわらむる、一とわらむる、一と
一とわらむる、一とわらむる、一とわらむる、一と
直

雜の句と冬季の句並上
初て同くと思へるは
あるは此下の論をよみて
よ

他門の古歌古事とくら
ば歌の詞をくらべて歌
うけても影も今もなぬ
あらハ糟粕或ハ溝糟とある

ありて門の古歌古事とくら
ば歌の詞をくらべて歌
うけても影も今もなぬ
あらハ糟粕或ハ溝糟とある

本歌の古歌古事とくら
ば歌の詞をくらべて歌
うけても影も今もなぬ
あらハ糟粕或ハ溝糟とある

よても冬季を題とすは
を題とす其意は
あり名詞もあれ何
よあはれその歌の
よあはれその歌の
よあはれその歌の

よても冬季を題とすは
を題とす其意は
あり名詞もあれ何
よあはれその歌の
よあはれその歌の
よあはれその歌の

取へて後句の上の句
をていふ句とて人
古歌古事を二句
る故に程大切の
文学余りのより天
延びのしやうと
又文字乃ちその
一二字よるは多
贈答の句考人よ
ありて

五

の字を控て呼ぶううアアア
右あうて画をまき坂に死す
句は全くぬき一たふかくはり

又右院は竜胆抱尾とりの
多あう上と下とつ合所
たての上はいふゆゑに
下の句をさへあうるは
多し抱尾とりの多あうる
八たうてま七とて句との
さ可能の句をさへあうる
いぬりのをさへいひとへ
なとさる作あう

前日祝言の末句はま
ても千とを子代まか
きうわく句悪く多あう
りまう

前日他門は入論言倫の姿
をさへ口の中又曲を念事
あうれ心中の曲を捨るま
うれ口曲は他門よりてん世ハ
云風あり
又曰句々十アあう物を
七ツあうる三ツ々余情
は余り物まれし其三ツを
もて服を調ふるまう

両声園とりの事
明月記はあり是ハ歌一
首のあうるをたててい
るは歌もま句も難

召出るとまものへ

又曰句々一とつものへ
は仕さる事ハかた
あう

毛衣子つみてぬと鴨の足

一物のうへま仕さるるとあり

前日詞かやふそ人まうつ
一節あうは彼と
是と工夫さる偏執をほ
あう

又曰叢句々落つるれ
まお句はあう

君の事極むをへ黄は極うぬ

越人の句をてま落つま
きうと又へ又此

重と出暮るる月歌
あうけあうる
是は歌帳
の句はまあか
ぬを君う代は
かけ
桑旦とま
侍る申忍ん
まう句奈
難まう
又曰句を
作る年作さ
るんの直を
まふん
の
作る一詞の
作好へ源

又曰句々七八分は言つ
たまやけ
五六
分の句々
いつま
あうは
但か
いへ
ま
常方を
五六分
まき
ま
あう
源案
十分
ま
作を
五六分
まき
ま

又曰叢句々大方物語の
やうにま
あう物
あう

五

あらん程ありけり
すまぬれし又も
く後けり
く思へり
のふんを歌まの乱ん

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

かく主人公を告ぐ
いづれも句はあつた
此作配可御主人公あつた
繪はかく生ぬ物之
強ふか、生ぬ物あつた
お句の趣平物くあつた
つは八偏あつた
りり生ぬ物あつた
ふの句作あつた
よ生ぬ物あつた
きりつき物あつた
付了故は何れもあつた

入らぬ故に嵐雪論は雷電の謡は管公大に怒り
強ひは前よりあつた
ふまつと吹くは強くと火焰とあつた
此作前よりあつた
とあつた文勢あつた
物の本情あつた
菊はお句あつた
紫は力あつた
た句は自あつた
叶ふはあつた

幽玄体 行雲 廻雪 長高 高山 遠白
 有心 物哀 不明 理世 撫民 至極
 澄海 麗体 存直 花麗 松躰 竹躰
 可然躰 秀逸体 拔群 寫古 面白
 一興 景曲 濃躰 見様 一節 拉鬼
 強力

連歌の句難をりし事あり例証にも有る
 心敬僧都云凡俗多る句姿の凡俗心の凡俗の
 姿の凡俗を閑へ安く心の凡俗を少なきか
 やありん道よん地を思ふぬ人の句よそあや

事も多物なり景曲の句よ大なる有る
 あり句を作し閑んまへ
 冬心不若とりし予既平万葉集の沙汰あり素
 よる俳諧にも有る事
未来記
 山の子孫の松乃きりみとれ
 かの由よはけつそむる色
 定家卿判曰ふ山より名所もや又如何まの
 みとれゆつつけ鳥のかく衆とりの歌とそ
 志ありと見ゆ松の音みとれん得ま一向無心
 不若のそむとやと云く
 也

皮肉骨とニツふとけきる 肺子年其息を正
 考皮をまんと思ひ肉をつまんと抑よる此色
 の大煙い之自然と満足の例然と調ひ未練の人
 二教も持きぬる之此境修行を急し其多の
 も因縁之
 翁曰盤句を門人よ作志多附合を先吟骨を
 附合下の句よ二五之四五二四之とふ事

いづれも免ていとちぬる

二五之四

せきにあられをさくさくを

待きく君よ一巻さあつた

五二四

橋翻里浮くきを啼く

峰の旅人の行末もあらは

二五五二あまき一之四ふく四之よ路
 好まぬ些とも子句なるとも場は任を

○附句抄六躰

並

いつと至　　くらへ　　むつらり
くらつけ　　くみさし　　ととく

是より分れたる葉辨ふ変とて一葉録とを
定海へ凡度く自托するを專要とす

○俳言とりし事

翁曰連俳元一之俳言ハ音をとりし詞を於て
連歌をとりし事之連歌ハ出る音のものと
を俳言とりし事或は原風凡帳拍子律の調
子偏ありぬ如蝶の款あり子句連歌より鬼
女就席より子句ありの言塔を以て俳言連歌

は語し詞は極小飛梅ありの三葉を名抄す
銀色の同書すもあまと思へ侍るか甲の物みち
俳言

但俳言は極小俳言とりし事いとて連歌
よ全俳言よ美しきもの俳言は是を
りし他門ハあまは常流より誤あり

又曰俳言は俗語平話よりとりしと誤りしや
俳言をもて俳言とみゆるるも通ず事
ぬ案ありし俳言の雅言は俳言の鄙俗語
俳言は俗語平話を正さんるは鄙俳言

西

富士路正之佐刑部卿の
君のあま菫のふゆのあま
詞多々俗語俗語も同た
も歌書の中は誤りて和
所多々俳言の世の俳言を
思ふよいやくも拙くして
歌書のあまも分けられ
何れくまて下りてとあり

体的論之退て不見就る如
凡より世帯て此の筆致を
しつて

畫は若しを句とてしるは
と画題よのなをみるに似ハ
て画を廢てて画より止らば
畫題を畫を觀しつて
句をみるに画題の句よりハ
何某觀をて書し

菊曰く句は中りなを全
執等三人より五人迄
の數を可也家通十人
執筆十人より二十人
なり家通も三人より五人
なり家通も一少
家通句家通も三人は
非なり一節の詞を
是は満ちあはれなり
位并れども追加冥然に

菊曰く此の文とてふは
一古代の文章意此の文
とある文章の大意を述
つて之は序題とてめ

とハ寫をらんひ雪海をせんち牛房をらんち
の類にかゝる書らんを都より云はれし平話より
左用ひか

又曰く座敷といはんより院墻法師とて種云
摩訶といふ一及ウとて今免う一や里てとてり
也

又曰く後を獲る詞ありて畫の意をわきまを
作らば文章の四文字く一書へき大かとの格

○後句合の事

菊曰く後句合 密議判とて連申會合して論議

批評をてしりて人柱合の密議判の格に於て判
考も是れとあり本判とてしりて未だ必序とて
跋も是れとあり且又句引をてて作はるは
歌合あり是れ格を假しりて又即興の判を
左右の文章ををてて未だあり秘語ありと判者
是を以て水もかゝるは判を未だりて是れ多
也

○文章の事

菊曰く文章の事熱名を文章と云

- 序子 曲序 來序 内序

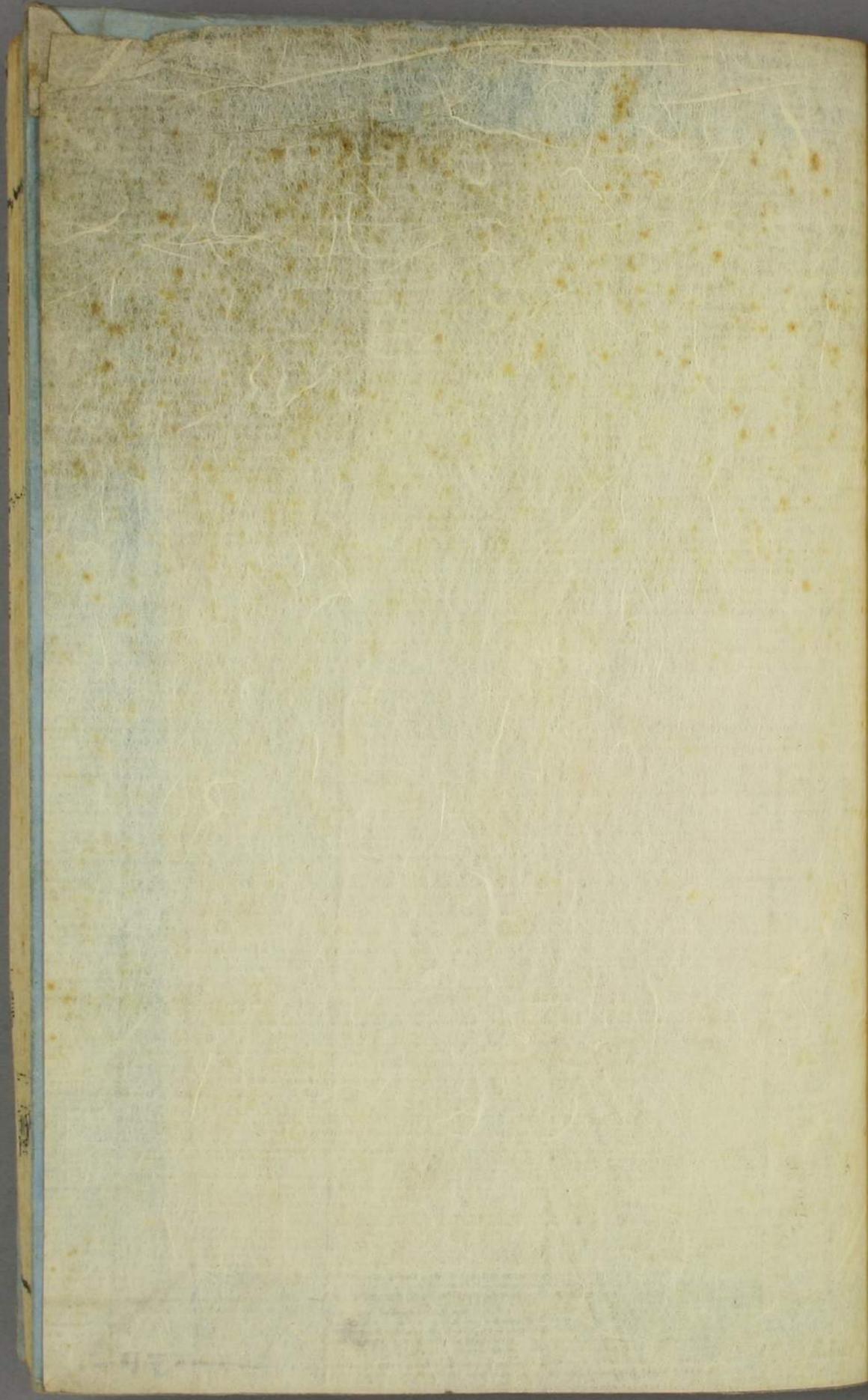
也

てゆきむらさきり 数少は子
八宗通切者の任より短尺
三折して巻を去る一巻二
句作して各序より巻を
うけ極まる句を右の極冊
よきて執筆より少く極冊
也
○巻通切者と同

て作は魚一あらの糸の執立をえり我を抄く
又曰六尺を越んと欲するもの正は七尺と
一しうれしんをよむと形は入るくんをくた
きら古人の骨中をきらるるありあはる

師説録と集書ありて此書はむな考ふる本
一巻の分おしりたる二書更は連綿たる
あらんうまを亦重んじ魚は種もあはれと
もは糧よきをたはありか 予亦諸書の類
巻を整理して本我を照し又一二の増補を
加して存するをあらわしむる情を抄
あはるるを

学舎居士



直 距

三十一

[Faint, illegible text within a rectangular border]

蕉門
俳諧

師說錄

坤

いふや初心のうき返り
庭名にかき一切を
の任ありかくいふ上よ
一編前後の夫より
世帯傳ふ詩書を由由
予諱の道の極秘門人
も志す人後三三子の
三氏家古書傳ふあり
予書集れども人
書くさ付をたの極秘
院せん戒を背とも万代
傳りて跡を尋ねん
まはし編は後より

粒句ありし身の三言ふ
世をよとちし三言の
あの手は極とさるや
扇のちねりし
景曲 景色 大
梅の春平の河と日の
さあろく小雛子の
秋の空尾との杉ふ
おのれく一羽海も
同中

灰汁桶の糸ゆり
きりくす
油りきりて書寫す
此後付のしきらき一
の詞練の自讃の
かや未句は人なり
事と付出して未句
を抹きくも附也
を三の目高とす
但人など未句
出一人等あり未句
なれば付ある事
の子表へ是又その
出ふ

鳥の羽も散ぬと川
一吹風の木葉
晴色や苗代時
明とと雲む
同小
字法
梅のうき返の
おのれく一羽海も
人偏人情人事
師

振句ハ強ち挨拶ありて
も亦句と履きまゝに
あし一々ハ左に
お句の注を入りか
はなぬ也

振句よりち強ち其句は梅嬢は叶ふ中うに其家
習より愛り一を二を擧り此の注をりて集
翁の作意を兄と云

挨拶の句

栗をよみ詠あり 樹を若き申

古人かやうの歌乃あう

霜多きまん西行もよみ詠の歌

よき歌と答ふ風の破道

花もかや吹きよる年の子作表

田植とよみ詠 詠乃詠起

名所園名所名等の振句より強ちまゝに一

かやうの拾を正しくす
事ハ名辨のまゝに
の時とかりハ平常に
字体の伴借ハ畧式を
りぬいゝやうにまゝに

但名号の時ハ法の画
正しくまゝに 変換あり

名号の俗體より可忌受り
より了調ハ可忌奉古法
に教へ有る者ハ一向是
を破却して用ひ詠をぬ
りていひなまりたり
あり取捨ありて可忌受
ハ戒を強てハ礼に當りた
る是を名中にも俗體
なるハ捨絶ありと見ゆ

名の所を對寸法あり

あまの寺一了兄とよみ詠の田植唄

並あまの寺免ん不破の年月雨

古法ありのころといへども對ありてまゝに

翁を拾ふありと云

神納法樂祝云候不違悔過名懐齋本都

名辨の俗體よりまゝに強ちまゝに

しくまゝに但は強ちまゝに作るなり

子年葉句

栗月や酒のつくく並に

師

一季の表々せねとリ
う法あり

はるり融りのやふなるありかゝる時々大方
人事を附る之

五句目六句目可然此季一節一これきぬや
にと少得一一八句表の時々此二句各段の場
まを仕よふた所ありやもまをれと表をぬ句
能出するものなり

七句日月を去る時冬論を秋の發句の時ハ
爰ハ他の季の句を去る可季一歌仙ハ一季より
もろくくうくは名号の俳諧ハ大うと法よ
ありとふらした之

修行のしめより格控
しつりハハあはれ前日
格ハ守る一一格ハ入る
格外ハ格一一格外ハ修
行しては格外の格外ハ
事を表明する一一守るハ
かゝく破るハ守る一一守る
たハあはれハ放逸ハ
落て道の則を失ふハ
未練の華あはれを思
ふん

此季より尋常の依格字体より爰格も時ハ
随てさほく出来たる名号の俳諧ハ真なり
とも行をく一一其れその格正した之行を其
次なり季ハ爰格自由体之此故ハ前集及云
控のまはういゝる爰格多一葉とい一一も名
号の俳諧もあはれ只自由体にて格をわら
此位ハあはれと縛きを縦横を季ハ
と此師家もあはれいゝるも自體はあはれ若
一人もあはれ川原一發句もあはれ字体
ハハ爰格も面白と俤もあはれ前集の旨と

師

きくわくを最句の字体あり
 折るの句や里句きくわく小免の誤り
 尤表の折端をいさう心きくわくあり
 考中よきてハ其巻面の折端毎に安れた句の附
 るの後の句附出さくお力なき故に却て巻中
 悪くなると然とも折るありしりふりあり
 しもあつたあつたへてあつたなり故に附
 合ら一句考中やふていさうたつたむね
 強さやあつた店のあつたあつたあつたあつた
 の出さるるのこあつたを句のこあつたあつた

悦は曰初表の初小意を
 悦ひ又二句目をハ表の句
 位を折れて折るなり
 るりやゆゑハ本式十句表を
 累して本表の八句表を累
 きしり起すこ本式十
 句のこハ句を表し折る
 余りの二句を表へ折る
 是れ表の内二句の表の内へ
 来りてあつたあつたあつた
 なるり折れ又本表の八句
 を累して六句表へ二句を
 るり起すこ本表の八句表
 たりと本表の八句表を累
 して六句表へ二句を累
 して六句表へ二句を累

衰しつり平意を附り平待意をこ世に極へ
 至待意と名付り制まらハ何事とをわき取
 を問さしひしとけさるる祝詞なるの依
 小稱の句先存ひ出さるるよりさるる
 句ひの巻揚句さるる意の句をさるる事なり
 ころかへつて祝意ありと前の中さるる
 まで終るる前句ハ免れ言控の依り愛六
 の根を依母の巻巻りと前句ありさるる
 席の空通を制まると背くさるるは其後て面
 ぶさるる物々衰しつり二句さるる制り

師

九

書付の既述を兄より人の
の二句もつゝ時をいま
人情附けはくさくさ神妙
遊句を付けてそのまゝ
ふ力をつゝへた揚あま
らけりて極末只地の附の
まゝ二巻たりとてあはれと
哉をなるともろく強め

て人情を抜く氣色言語を付延き之を
かくいへたとを格式の中より免く是にかき
偏厚なりやち入事へは附合を前句より
ひよふ物なりはたかくんを得し人へ愛伴自
在なき事しかくて人事を五句もとてゆへ
風景の句も二句より三句より其情の句多く
續けて書中力をくく弱くならずなり仍
て其情の景曲二句も續くは二句目を必付起
し人情を抜きし愛伴人事人情を共し
て附着する上子の業あり初心のくちなり人情

まのあゝ兄申すのこ
いふこれと人情をさむる
事をかゝ怒りてまや三句
四句より人情をさむる
み控へたといひ一人人情
のまゝに附するも害なき
事とて申すは有限の人
柄もいてきくへきく
仍て人情を付するは修治
のまゝに附へきく去來も
既に此事を論たり

之四句も續けたり其の之をむへた所より
人を抜くを忽ちくぬき一巻の疵と書
遊了居た下を自然と出來る之を思ふなり
切者の眼をくつてを難しき事考へて手紙
ひく水より所を何句もくも附着するは當流の
力なり是れ自然の境なりあるを世間の既破
る之四句も人のく人を續けしとくさしとて
必無理な遊句を附するなりいふ水たたりるに
懸してと去ひもてゆく所大方始終同一調子
なり附けたりは場と地とをく境のまゝなり

師

なりかして一巻の眼と見よへた所なく力
なれあり轉愛不愛の愛今日の上ふ出ると了
消を在起事そういふ定あらんや付在起極
よ若句う附けとくと来とるう道在立場も亦
を心得之事定り事をもみる自然なり

伸句とりふと縮了句お對してりふ名なり縮
句を力を作して付心も立案を付縮了なり伸
句を迹了付申了めとる思ひ切了死狂兄
よとまを付ちとめとるよと明月の影湖
水秋の比良の初案と二句附伸了る風景

えといふ水は是本の二句と其前六句とす
緩中急の附表其れと死と起といふ事
表了其のれと按在立場よと行りあの兄は
たうして又たを附責了時を定極よとる故
或を海へあはれかへる或を重と付て背胸表
たりて忠お赤麗とるは六句とも表裏を按
在立場を迹了は好とる故此二句の伸句と
去とれ快然とて一入案合とるこころに兄
申了深川の起活平嵐雪の福は附句を
おなく料理の甘辛く苦く物よる大

師

依義の表
 此節ハ根も思ふは
 不自由さすし句殊は
 多しに作りたる句多
 然るに其多しある一
 句を以て其の取合不思
 義に非ずとて又申す

少能きも極了能くあはれ悪きとて亦何
 一かたはといへば此論よく當り非ず一
 句の編りも場より定まらざるさまたるも
 なく尋常の伸句の中なるを己にかけ
 へて却て卷面榮ひる奇麗な風味よ
 りて成るあり物なりさばよれども
 此阿きも阿かきとて法を
 存る句を伸句と因中りて免る華多
 誤る伸句と阿はあはれも伸句と救多
 多しは殊外に附つて足らざる又申す

及席とあつて書きたる句作りて
 場の意をよみ取り句を投中りて先師
 殊の外工夫ありて冬の日葉のさし
 たる中

孫の實つては常好例なり

と云句より其後の集りも程此さうい
 炭俵ふかく源川集りも亦阿りて其後の俳諧
 之三四句完りて人申ふ所阿れども満
 附語も場なり故にや句は之全體あり
 けりはあはれ力を盡さず弱く調子も緩急中

師

註

なく常小平地をゆくゆくゆく色はハヤ里句
あへた場ふー尖り居る所また故なり 西瓜
きりきり梨子喰らつたのふりく 鰯をこに
切込かく大木を傍りあたくあとのをーを
味いまりて其氣韻句相まうつ里木とあは
海となつて自然の意氣自得まー附句を
来り上りふささばう里まうら得をうら
其意あけりふのかー
景色と風情との句を同多しとせよ
是も誤あり景色ハ附きあはる海の聲を

をさへみ場の外らふ 風情と附素うらちよ
毛句の人を出ささうて人の上を同く句句を
附あつらう二句の間は其人居住ると見ゆ
象之

不つれきる去年の探訪のあつら
寒瀬を山雀の籠の中へ
是あのかの伸句あつらふ句論景色と大は
あまきり其を風情の句とりよの景色を
一節もまた茶のあまきり原
薄雪の上は露のあまきり

師
一節

古説に附句ハ一巻蓮の
糸の通り〜〜〜
リノ散あり〜〜〜
掬法と守れと古の俳諧を

是なり其用も場も句作も大に異くと云ふし
捨句とりふら屋呈句とら又別なり是ハ儲の
會なり然子句より然さ中一の時の心得之曉り
中一これと各能ふ句とんと下ふ思ふ故に
席沈て去ぬり出〜巻行〜〜〜生慾を掬
て捨句あり〜席の糸を引きたり今少〜
と思ふとあるも自己を掬て去る〜若ぬ里
席〜りの糸後なり
卷中序守急の事古より教る所なり
其中一亦緩急中の詞も〜事〜此事を

連歌とい〜〜詞の〜への
端之筋の道ハ詞の〜の
を〜〜の流るれ
ハ附合も是〜〜連歌
井よひ古の〜の詞の上
の〜の詞の〜の
至てつ〜の〜の
句の〜は附して古俳ハ蓮
の糸の上を貫通〜一筋
の流るるを〜つ〜ぬ
庵守〜を〜の樹ハ
き句い〜は〜此三〜連
の糸をみちひき通す〜
ハ一句も此〜内〜
句有れ〜と〜
〜母通さ〜て連句
一巻の疵〜なる〜但此
〜もれ〜一句も附〜
句〜ある〜

先師も善〜沙汰〜及〜持の大手
なり初心の華か中一の事〜者も水も句作端
なり却て修行の〜なり
句毎ふ風流と風情とを失ふ〜風流と
〜河り風情と姿あり風流なきハ俗も
風情なきを去ぬり〜句作り作利口
是〜いや〜いひつめ〜附合と
いぢ〜但此風情と〜初まりハ風情の句と
稱するの〜別なり去ら何の句〜も〜一句〜
のよ〜を〜之を〜句〜本乃切

師

と満月を一朔の修行たる年必失ふ一と云
去来りあるまけくすある如く草の青むた
るも今人のまをらうしとも同く松と思ひれ
んもそらんわと腹いたくもせんかこなり
堂の静しく是を思ひあさく免とあそふ
るもなりとむ一と云年あり

月の句異名と云ふはうらなはる松と云ふ
月と是を制して月の字出一く付と云ふ
中とわく一を附くもうらなはる松と云ふ
百句も二十六句も意難の句なるを云ふ

星月朧の月を括弧
係此けあふ丁めの
まよひ

月の句つういりやうもありと異名の編
かゝりなりと云

星月朧の句よあふらま秋より他の季は
有明の月の句を較ぶる傳授の由り
おぼく月をわらふまはるを云ふなり
いりらゝる櫻よまはるはるその愛始り
初もあふらまはるふあまの月を愛始り
まはるら不学の程なり月を引とけ或は
あふらまはるはるも舎解あり席よ其理
あふらまはるはるの席無名の俳句よ

師

子身そちあつくもあき事一寧り道とあきく先
自物子師くも仰くく其其生時の運い變化
物好まき古ふたれた後扱きもあき事一河を事一
是々を空限の事ふき又き命くもあき後去来
系様とりてあふかへたりも古傳ありといへ
免川らした物あきり是字をりても思ふ一
表の句の事定坐ふ事ともうりも事一勿偏
子細き一後扱の扱々様のか子細あり先引上
る方々くく一かきあき事一もあき事一あき
べくは様きと花りき事一秘事あり恨ふ

ありきましたためあり句作を思あり他の説
よみ終るも故きくもあき事一此外もさ
あき傳授の秘事なき事一もあき後扱き傳授
ときも事一大方も用もたきり或も玉極の事
或も金くも事一もあき事一秘事とさり
後し申き事一対も事一途の人たり自は珍事を求き
後し事一侍も事一秘し事一教も事一さき事一業
高人あき事一志き事一も道も深知も事一業
ハ人よりき免許も事一免悟の人ハ事一も事一
も免許も事一免悟も事一免悟も事一免悟も事一

師

お城の事
 みく聖と事一の
 中々人の名
 右定望の一二句水仙
 此等茶茶聖櫻木の句
 五つ々ハ花の字極物花
 の字ままハ了故ハ宗匠
 筆のやうくくさるれも
 其人多位正客まもの句
 張く返すは及まは
 此句作の例を固由此体
 を味くく作ハハハハハ
 もあふくハハハハハハ
 句を付ハハハハハハハ
 の教なり

人をあつては傳ふ
 茶茶ハ植物各台時をねまとの心をさる習
 其時其一句を離して茶の極あふおまの
 其句ハ其を附て正茶ハ扱ふ由ハ後を
 植物定式の古様ハ其法ハ此扱あつてハ
 茶茶ハあはれく植物をさる習双まき茶
 急と茶ハ其句を戻して一面ハ情をさる
 ら及只貴人ハ其の風も極物をさる習
 ハ傳ふ事ハ其茶を其時を用ハ扱ふをた
 めの扱ふ事ハ其茶ハ好まぬをその茶せん

お城の事
 みく聖と事一の
 中々人の名
 右定望の一二句水仙
 此等茶茶聖櫻木の句
 五つ々ハ花の字極物花
 の字ままハ了故ハ宗匠
 筆のやうくくさるれも
 其人多位正客まもの句
 張く返すは及まは
 此句作の例を固由此体
 を味くく作ハハハハハ
 もあふくハハハハハハ
 句を付ハハハハハハハ
 の教なり

茶茶ハ植物各台時をねまとの心をさる習
 其時其一句を離して茶の極あふおまの
 其句ハ其を附て正茶ハ扱ふ由ハ後を
 植物定式の古様ハ其法ハ此扱あつてハ
 茶茶ハあはれく植物をさる習双まき茶
 急と茶ハ其句を戻して一面ハ情をさる
 ら及只貴人ハ其の風も極物をさる習
 ハ傳ふ事ハ其茶を其時を用ハ扱ふをた
 めの扱ふ事ハ其茶ハ好まぬをその茶せん

師

花柑子
 云々正意なるを
 以上柑類の茶と同なり
 正意遠きも是柑子
 の内の一種俗に花油を
 とり出さるるを花油柑
 見たりとてとれんとす
 實美の茶なり茶味香
 解さるるを花油柑
 拾ふ集
 夫亦集
 あの茶の伴歩不ある人
 中よりたうりしき
 茶柑子か
 是なり林より茶よりけ料
 理のありしよるこつよりの
 柑類の花の味香夏之此より
 春なり

しといふ茶の字あねと茶条とを連し
 花の茶と改けて正意なり難あり一季茶
 名ありとなり花句よりて其強よかす茶を
 定て後を附る
 茶のあつた植物ありは花の茶と同前
 茶の茶植物之
 花の波水遠き植物の茶の雲と茶とを
 雲を茶とも思ふ伴ありし句よりて分別は
 片むの波を散て浮るるなり
 花の部正意と茶四正花之正意ハ標をたす

ま時長くの花をさ向そののまふとなり
 名録の茶と稱する茶の事之句はの花と本式
 は揚句をひらりと付くは只ふらたあり
 意の句二句目骨折之詞より附接く是を念之
 一句よりてけくすのあつた付く茶句は心より
 二句の間年意を合するなり當流詞の意を
 とつて心の意を意とすなり

終

直旨傳の序詞を考ふる
は前記をかりしは越人

此書既と傳書とく秘記かた古の受てあり
さしとも重なる習の種とも亦少くも秘記
秘傳なるをさかろく思ふ事申すは
後記にも阿しう

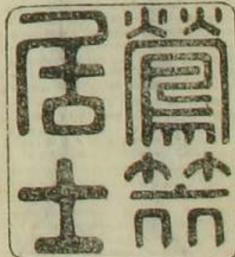
二書の不傳の所は序詞に詳ふる如し

の庫中に入りてハ思ふ
ハ此書ハ先師と志此
滅後をいれりといふ
按るに記奉の傳に
多の次第もいれり
ハ一々貫通してハ
越人の編直さるる
思ふに既前記の死後
玉の師と志此
むすむる稀に前記
さるるありハ此記奉の
すもれんハ此記奉の
くもれんハ此記奉の
伝きせんまもるる
る

然して如く祖父此事を越人より受てて古の表
平書古の古の間易さるる極に難なる人
或ハ帛魚のめい文字を欠れ垢のたふす
を巧みに見る甚んを以てしむ仍て其の
紙魚の跡の欠字を補む一と監書して是を新
書に明らうと然るに此二書天下普通平
傳す所ありは秘書の極といふなり 秘書
さるるあるは今を以て其の事傳
るる道と云ふ不朽なる志を以てする
の

文政八年乙酉季秋日書

學心居士



文久二年戊午

仲夏刻成

芝飯倉五町目

萬屋忠藏梓



學者必慎其所道。道於場墨老莊佛之學。而欲之聖人之達道。見宗廟百官之美。猶航棹衝港絕滿。以望浮於海也。故求觀聖人之道。必自孟子始。孟乃溯孔水草處。濫觴也。孔子之道。至大而能博。門弟子不能偏親而盡。故學焉而皆得其性之所近。如顏子之得心齋是也。蓋師親在。指傳錄。乃杏壇灑掃弟子之所學。行。子六經也。乃論曰。三代既往。滔滔者。為已。六經備。而往者不往。三代以還。滔滔者。為窮。愈變愈出。不觀古於六經者。多有。故王道不墜。而在。揖讓禮樂之盛。與商彝周鼎。怡目而不適用之宜。取舍斡旋。為之傳繼。

得之真儒王佐才矣。若夫傳繼如子夏之易傳待
 序儀禮喪服。撫定論語。如天之所以不爽。兩化成德
 達財富問私泚。教也。然君子視之。無不可。小人視之。無可
 何則。世道興替。繫於人。不繫於天。故君子以龍塵釜魚。行
 拂。逆境。以羞順。顧廉耻。以羞順。小人僥倖。以營求富
 貴也。且得者。時也。失者。順也。以失為順。不憂患。美自
 而。或以富貴貧賤。徧禍福。非也。與富貴而力多
 患。若執若貧賤而。仍聰明。為予。果貧困於
 將來。打獨活。有風。而。不。受。風。而。獨。搖。其。儒
 王佐才之觀。觀。耳。加。旃。我
 邦大雅。垂善。天子國也。文治中。清原賴業。續

禮。至學庸。表章之。其明哲。暗合於孔子。故言志。以
 今猶古。今茲文久。或。益。一。費。重。鳩。立。於。師。悅。焉。刺
 廟。履。之。切。視。之。文。待。符。節。膠。合。之。孟。翁。之。於。滑。紀。之。道
 狹。而。任。於。禱。帶。之。無。陽。帝。不。當。世。之。隆。也。不。兼。折
 十。蒸。解。採。筍。者。於。寂。然。亦。山。中。宰相。絲。羊。腸。臨。翠
 微。則。不。兼。嚴。嚴。黑。牡丹。而。為。初。平。起。石。場。之。相。者。抑
 無。洞。才。矣。儒。王。佐。才。哉。其。向。上。之。與。敵。於。儒。家。自。有。中。焉
 者。一。處。去。席。青。沈。一。口。吞。司。馬。陝。州。立。跨。塔。下。柱。相。影。噴
 血。街。以。厚。朴。湯。平。重。衡。德。暗。數。行。雷。吳。氏。淚。多。擇
 焉。蓋。鴉。夷。滑。枕。後。火。以。去。盡。書。畫。日。盛。無。所。人。復。信
 酷。常。為。國。器。任。不。屬。車。乃。之。相。之。諧。謹。以。斯。而。之。相

甲乙丙丁... 相籀序

能言其真其兩針余

三善便曰。人常慮危。無有臨危。車行于腸。而仆
於平地者。慎於履。而忽於易也。保天下。亦如御車。
雖治平。何可不慎。危之至慎。事復如斯。蓋公祖之志。
全葆光於直指師。統兩編。銘之親之。相之公布。滑
黎。為於世也。打機。石九。以愈。藏堅。癖也。年。色。蕉。大士
勢。不。云。乎。一。夜。兩。狂。響。傳。芭。蕉。虛。觸。成。音。倍。耳。驚
晉。泉。波。不。濡。一。雨。各。各。聞。響。妙。明。靈。心。圓。通。直。上。号。於
繁。蓬。之。網。亦。復。云。遂。以。為。教。

皇和文久壬戌卯人夏松蔭多系彌之逐目述



三都

發行

書肆

- 京都 三條通柵屋町 出雲寺文次郎
- 大 心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門
- 心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
- 心齋橋通博勞町 河内屋茂兵衛
- 日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛
- 淺草茅屋二町目 須原屋伊八
- 日本橋通二町目 山城屋佐兵衛
- 芝神明前 岡田屋嘉七
- 同 和泉屋吉兵衛
- 下谷御成道 英 文藏
- 芝飯倉五町目 萬屋忠藏板
- 戸

三
聯

翁
林

東 山	大 江	野 火	燒 不	盡 春	風 吹	綠 柳	千 條	舞 綠	絲
三 春	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日
三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日
三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日	三 日

翁林
三聯

